
学生の絵本の選書意識に関する研究

——「絵本に関する授業」前後の意識調査による考察——

横田由紀子 渡邊 舞(札幌大谷大学非常勤講師・豊岡短期大学 通信教育学部 こども学科)

井口美和(豊岡短期大学 通信教育学部 こども学科)

要旨

学生の読書離れは問題になって久しいが、保育科においても同様に、学生に小さい頃に読んだ絵本の題名を質問するとあまり挙げることが出来ないのが現状である。読書時間の調査にしても、読書時間は一カ月殆どゼロという学生が多い。そのような中で実習に行き子どもたちに「絵本の読み聞かせ」をすることになる。「読み聞かせ」というと読む技術を心配する学生が多いが、問題はそうではなく、「何を読むか」ということの方が、実は重大である。

絵本は毎年数多く出版されている。最近は韓国やアジアの新しい絵本もどんどん紹介されるようになり、国際的にも評価が高い絵本を読むことが出来るようになってきている。さらに、本来は子どもの絵本を作成する人ではない、いわば異分野からの作成者による絵本も目にするようになってきている。「絵本」といっても、子どもを対象にしたものと限らないのである。そのような状況において、学生は何を基準として絵本を選んでいるのかは、様々な研究会において考えるべき問題として指摘されている。絵本の選書は、これが一番良いというものではなく、読む場面に応じて工夫されるものであると考える。そのことから、学生が選書をする際に基礎となる力として、多くの絵本を知ること、また、どのような点に着目して絵本を読んでいくか、という意識を学生に持たせるということを目的とした授業構成を考え実践した。

学生に具体的に多くの絵本を紹介し手にとって見る時間を保障する、教科書として具体的に季節や年齢にあった絵本の提案をする、また、ジャンルによって絵本を紹介する取り組みは、学生に多くの気づきを与えた。さらに、絵本作家による特別講義や、原作が同じで画家の違う絵本の比較からは、「絵」を意識する姿勢も生まれた。授業の構成を工夫することで、学生の絵本への関心を高め選書意識を変えることは可能である。

キーワード：絵本 選書 学生の意識

1. 問題と目的

大学生の読書離れについては、以前からいろいろな場面で指摘されているが、保育者になろうとしている本学の学生においても例外ではない。日常的に読書、あるいは絵本に親しんでいる学生も多くはないのが現状である。なかでも絵本は、家庭に蔵書がない場合には、意識して読むことはほぼない、小学校低学年以来、手にとることはない、という学生も多数存在する。そのため、1年生後期から始まるそれぞれの実習では、どのような絵本を選んで良いのかわからない、という声を聞く。実習前に絵本の読み聞かせの技術的な側面を心配する学生もいるが、絵本の選び方、選書に関しても、実は大きな問題な

のである。この問題を解決すべく、数年前から担当授業内で工夫して絵本の知識を増やす取り組みをしているが、今回

- ① 学生の読書経験や絵本の読み聞かせ経験を踏まえて、学校で絵本について学ぶ以前の、絵本の選書に関する視点を明らかにする
- ② 実習前、実習後(実習時の振り返り)、授業後(絵本に関する講義受講後)の3時点の調査から、選書と絵本に対する見方の変化を明らかにする

ことを目的として調査した結果をもとに、絵本の選書に関して考察する。

2. 方法

保育科2年生を対象に2019年7月(保育実習・教育実習前)、9月(各実習終了後)、11月(「児童文学」授業における絵本の内容が終了した時点)と、3回に分けて質問紙調査を行った。調査1(7月)は84名、調査2(9月)は82名、調査3(11月)は78名の回答を得、分析対象とした。質問紙の構成は次のようなものであった。

調査1：①現在と過去の読書経験(好意度；5件法・頻度・読書の場所)

- ②絵本と読み聞かせに関する項目(好意度；5件法・子どもの頃読んでいた絵本のタイトル・読み聞かせの経験；5件法)
読み聞かせしてくれた人)

- ③実習での読み聞かせに対する楽しみと不安(2項目；5件法)

調査1のその他調査項目

- ・ボランティア等での読み聞かせ項目の有無
- ・実習で絵本を選ぶ時に配慮したいと思う内容(発達・絵の魅力・言葉・ストーリー・その他の中から選択)
- ・オノマトペの認知度と知っている内容に関する自由記述

調査2：保育所実習・幼稚園実習での読み聞かせについて、以下の項目についてそれぞれの実習について回答してもらった。

- ①実習中最もよく読み聞かせをした絵本のタイトルとその他実習中に使用した絵本のタイトル
- ②絵本を選択した理由
- ③実習での読み聞かせの状況について(はじめて読み聞かせを行った日・実習中の読み聞かせの回数・子どもの年齢(クラス)と人数・読み聞かせの場面・読み聞かせのねらい)
- ④読み聞かせに関する振り返り(6項目「1. 読み聞かせの練習を事前に十分することができた」「2. 読み聞かせをする前に、子どもと十分に信頼関係が築けていた」「3. リラックスした状況で読み聞かせをすることができた」「4. 練習通りに読むことができた」「5. 読み聞かせの場面でねらいを達成することができた」「6. 読み聞かせをした後、子どもはその絵本に興味を示してくれた」；5件法)

調査2のその他調査項目

- ・実習で読み聞かせをしたときの子どもの反応で印象的な行動に関する自由記述

調査3：①「児童文学」の受講前と受講後では絵本への考え方や見方にどのような変化があったかを自由記述で記入してもらった。

②受講後に読み聞かせしたいと考える絵本のタイトルとその選書理由を自由記述で記入してもらった。

③保育者として現場の読み聞かせで配慮したい点について自由記述で回答してもらった。

調査3のその他調査項目

・オノマトペ絵本に関する効果；17項目（5件法）

以上の内容の他に、自由記述の項目を設けている。

3. 結果

(1) 学生の読書経験・読み聞かせ経験等実習前の学生の意識に関する分析

読書について「好き」「やや好き」と回答した人数は51名であり、約60%の協力者が読書に対して好意的であることが示された。現在の読書頻度は「月に1日未満」が55名（約66%）を占めており、読書習慣の少なさが明らかとなった。小学校から高校までの読書経験の多くが、学校で実施している朝読書（小学校：約56%・中学校：約61%・高校：約42%）であり、その習慣がなくなったため、現在の学生の読書頻度が低くなっていることが示された。

絵本について「好き」「やや好き」の人数は76名であり、約90%の学生が読書に対して好意的であることが示された。読み聞かせの経験については、「よくあった」「たまにあった」が72名であり、約86%が子どものころに読みきかせをしてもらった経験を有していた。読み聞かせをしてくれた人物は母親（44名）が最も多く、以下保育所や幼稚園の先生（42名）、父親（7名）、その他家族（4名）、祖母（3名）であった。

(2) 学生の選書に対する意識の変化

本報告では、実習前（調査1）では、「子どもの頃読んでいた絵本」、実習後（調査2）では「実習中に選択した絵本」、受講後（調査3）では子どもに「読み聞かせしたい絵本」を回答してもらった。

調査1では、子どもの頃よく読んでいた絵本のタイトルを記入してもらった（R=0～16冊）。総数243冊、学生一人当たりの平均で2.87冊のタイトルが記述されていた。『バムケロシリーズ（22人）』が最もよく読んでいた絵本として選択されていた。続いて『ぐりとぐらシリーズ（16人）』、『そらめくんシリーズ（9人）』が多く選択された（表1参照）。

調査2では実習中（保育所実習・幼稚園実習）の読み聞かせで選択した絵本のタイトルとその選択理由を自由記述で回答してもらった。実習中の読み聞かせでは、実習での活動の導入に合わせた選択（n=30）が最も多く、次に子どもの興味関心に合わせた選択（n=14）が多かった。調査2についての詳しい報告と考察は、「豊岡短期大学論集」第17号（2020）に掲載のため、本稿においては割愛する。

調査3では児童文学の授業を受講後、絵本に関する講義内容を踏まえて、読み聞かせたい絵本を記入してもらった。42種類の絵本が選択された。

『みえるとかみえないとか（16人）』が最も多くの学生に選択されており、続いて『まるまるまるのほん』（10人）」が選択されており、この2冊に回

表1 子どものころよく読んでいた絵本のタイトル上位（調査1）

バムケロシリーズ	22
ぐりとぐらシリーズ	16
そらめくんシリーズ	9
くれよんのくろくんシリーズ	7
りんごがひとつ	5
へんしんトンネル	5
だるまちゃんシリーズ	5
ばばあちゃんシリーズ	4
どうぞのいす	4
しろくまくんシリーズ	4
きんぎょがにげた	4

答が集中していた。『みえるとかみえないとか』を選んだ理由として「障がいのことを知ってもらいたい」や「色々な人がいて、様々な感じ方があることを伝えたい」といった理由が挙げられていた。また『まるまるまるのほん』を選んだ理由として「子どもが見るだけでなく、参加できること」や「子どもと楽しさを共有したい」といった理由が挙げられていた。いずれも、授業内で紹介した絵本が多く選択されており、授業で絵本に触れることにより、絵本への興味・関心が高まったといえる(表2参照)。

表2 「児童文学」受講後に学生が読み聞かせたいと考えた絵本とその選書理由

読み聞かせをしたい絵本	選書理由
みえるとかみえないとか (16名) (5名の記述の一部を抜粋した)	子どもがこの絵本を見て「障がいがある人」と認識するのではなく、「こういう人もいるんだね」と個性として受け止めやすいと思った。 自然に自分と相手は違っていて、正しいとか普通とかではなく、みんな違うということを伝えてくれる。 バリアフリーの絵本であり、自分と違いがあっても、お互いを認め合い、また気遣うことがわかりやすく描かれているため。 宇宙人がかわいらしくて柔らかい絵なので親しみやすいと思った。内容が深くてよいお話でユニークな部分もあっていいなと考えた。 子どもにもわかりやすい面白い絵で、色々な人がいることをさりげなく伝えてくれる絵本だと思った。
まるまるまるのほん (10名) (5名の記述の一部を抜粋した)	次はどんな展開が来るのか予想しながら読むことが少ないので、とても楽しみながら笑顔になれる本だと思った。 「次はどうなると思う?」「絵本を実際に動かしてみよう」というのが授業中楽しくてまだまだ見てみたいと思った。 参加型の絵本なので、一緒に楽しめる。文が少ないので飽きないから。 体験しながら、色の変化も楽しむ事ができたので、子どもも楽しんでくれると思ったから。色の変化、赤、青、黄色、と原色が使われていて視覚的にも感性が刺激されると思った。 見るだけでなく、実際に触ったり、次は何色になるかを考えたりしながら一緒に絵本を読み進めるのが良かった。
もこもこもこ (3名)	大人からすれば「この状況の絵なんだろう?」を感じるが、子どもがどのような感情になったのか口に出してくれるのではないかと考えたから 絵の色がはっきりしていて、抽象的な形が何かが、文章(言葉)に合わせて動いていて面白いから 文字が少なく読み聞かせは難しいと思うが、自分なりに工夫をして子どもの反応をみて対応できると感があるから
ふたごのしろくまねえおんぶのまき (3名)	温かみがあって、安心さをもたらしてくれると思った 動物について詳しく観察しつくした人が書いた絵本だから 特別講義を経てリアルな動物を描きリアルな様子を描いた絵本を読み子ども達にもよさが伝わってほしいから

(3) 授業前後の絵本への考え方や見方の変化

児童文学の授業前と授業後では「絵本」への考え方や見方にどのような変化がみられるかについて、学生の自由記述から検討した。児童文学では、実際に絵本に触れる時間を多く確保し、また絵本の種類別(「赤ちゃん絵本」「民話(昔話)絵本」「オノマトペ絵本」「科学絵本」「バリアフリー絵本」、その他、「文字なし絵本」「書き込める絵本」)に授業を展開し、多くの絵本を学生が学ぶ機会を提供することを目的とした。授業の実際の進行としては、以下のように計画して実施した。

- 1, 授業のガイダンス
- 2, 多くの絵本にふれる→前年度出版された絵本の中で、絵本学会が選出した後世に残したい絵本

にふれる

3-6, ジャンル別(赤ちゃん絵本, 民話絵本等)絵本について知る

7, 特別講義(絵本作家のお話を聞く)→旭川在住のあべ弘士を講師として招き, 講義を受ける

8-15, 児童文学史

また, 絵本の内容に関する部分でのレポート課題として, 原作が同じで「絵」が違う(画家が違う)ものを比較して自分の考えを述べるものを課している。あべ氏に依頼して, 「見る」ということに視点をあてた内容を講義にいられていただいているのとあいまって, 「絵」にも注目する姿勢を養う目的を持っている。

以上のような内容の授業を受けてからの学生の変化を探ろうとしたものが調査3である。

授業前の学生の絵本の見方として「かわいい絵本」「自分の好きな絵」「表紙が好き」といった表面的かつ一面的なとらえ方が中心であったが, 授業後には「絵本に対する作者の想いや伝えたいことを感じるようになった」といったように, 絵本のストーリーや内容を踏まえた上での見方が多くなった。また絵・ことば・リズム・内容といった各要素を単一ものとして見るのではなく, 絵本を一つの作品として理解し, 複合的な視点で捉えるような見方に変化していた(表3参照)。

表3 3回目調査 受講前と受講後の絵本への見方の変化

受講前の視点	受講後の視点
1 絵本は子どもが読むもの, 年齢に合わせた絵本を読むことが大切だと思っていた	大人が見ても面白く, 別の楽しみ方がある。子どもの年齢によって楽しみ方があるので, 対象年齢に囚われすぎなくて良いと考えた
2 物語になっているものが面白いと思っていた	同じ言葉の繰り返しが続くものや言葉のないページがあるものもそれぞれの味方や感じ方が違って面白い
3 ストーリー性のない絵本はつまらないと思った	絵に着目したり, 短文にも目を止めるようになった
4 絵が描かれてある本というだけで特に何も見方を抱いていなかった	子どものためにという意識がすべての本にあり, 様々な意図があって作られていると感じた
5 いつもどの絵本を選ぶのか悩んでいた	古くからある絵本はそれなりに人気があるから残っているいうことを学び, 古くからある絵本ジャンルで選ぶようになった
6 文字や絵というように表面的に選んでいた	絵本に対する作者の想いや伝えたいことを感じられるようになった
7 自分の好きな絵柄の絵本を読んでいた	物語が気になったり, 独特な絵が気になって手に取るようになった
8 絵本は導入のためのものと考えていた	絵本にも種類がたくさんあったり, 絵も作者によって違うものだと気づきました。導入として使われがちですが, 絵本から学べるものはたくさんあると思うので, 活かしていきたい
9 おもしろさ, 絵で見ていた	絵や面白さだけでなく, 内容・目的等も含め絵も文字も見erようになった
10 絵本は季節は関係ないと思っていた	これはどの季節に読むと導入とまとめがしやすいとか考えるようになった
11 実習時に子どもに読み聞かせて, 子どもの前で何か保育者らしいことをするための道具	自分がとても欲しかったり, 子どもとのコミュニケーションを取るための保育者としての必需品であり, 子どもの想像力を引き出すもの
12 可愛い絵だなと思って表紙から選ぶことが多かった	絵のテイストや中身もしっかり見てみようと思った

表3 つづき

	受講前の視点	受講後の視点
13	ストーリー性を重視して絵本を選んでいた	ストーリーのない短い言葉の面白さも感じるようになった
14	絵本の絵はかわいらしく子どもがわかりやすいものが良いと思っていた	力強いタッチの絵や少し不気味なものでも子どもが興味を持ちやすいものだと思う絵本が大切だと思うようになった。
15	絵本についてあまり興味がなく、導入でやらなければいけないという考え	面白いから子どもに読んであげたいという考えに変わった
16	見た目の印象や絵の気に入ったものを読みがちだった。	子どもの反応を想像したり、内容に引き込まれたりして中身を見るようになった
17	絵がかわいい、話の分量などで選んでいた	話が長くてもおもしろい内容であれば年齢関係なく読めるのではないかと思い、自分が面白いと思った絵本を選ぶようになった
18	ただ読んでいた	作者がこの絵本を見て何を伝えたいのかなどを考えて読むようになった
19	絵がかわいいなどの理由で絵本を選んでいた	独特な絵のものや写真の絵のものの面白さを知って興味を持った絵本で色々なことを伝わるものだとわかり、この本はどういった場面でどう読みたいかを感じるようになった
20	子どもが好むようなかわいらしい絵が子どもへ読み聞かせするのが良いと思っていた	様々な絵のタッチでも内容が伝えたいことそのものの絵本を重視する
21	絵本のかわいらしさを重視	絵のリアルさを重視した作品にも目を向けてみたいと思うようになった
22	こどもに読み聞かせるときのことだけを考えて、季節や人間関係だったり、「教訓」のような絵本を選んでいた	絵本の色使い、音などをみても聞いても楽しい絵本に興味を持つようになった
23	ただ物語と絵を見ていた	読み手への投げかけや一つ一つの文、絵にどのようなメッセージが隠されているのかを重視するようになった
24	絵の見た目、自分の好みで絵本を読んでいた	絵のタッチや素材、話の内容も重視するようになった
25	絵本をただの本だと思っていた	質感を重視した絵本があったり、仕掛け絵本があったり、子どもが読むだけのものではなく触っても楽しめる絵本という視点で見えるようになった
26	絵と文字で子どもが楽しめるものと思っていた	桃太郎など同じ内容の本でも作者によって見せ方が違って来たり、時代背景や用いる技法(アクリル・切り絵)があつて本当にたくさん楽しさがあつてもっと多くの絵本を知りたいと思った
27	リアルな絵などはあまり好まず、かわいらしい絵のものをしていた。子どもたちに読み聞かせるもの	リアルな絵ほど、本物の特徴が捉えられていて、面白いと感じるようになった。大人だからこそ楽しめる絵本もあると知った
28	絵本の見た目「かわいさ」「色鮮やかさ」を見て好きな絵本、読みたい絵本を選んでいた	現在は「内容」をまず、注目するようになった。「これを伝えたい」と思い、絵本を見るようになった
29	絵をただの絵だと思わないほど、絵は当たり前と思ってみていた	人や動物の表情に着目して絵から伝わる感情・情景を重視するようになった
30	好きな絵本もないし興味もなかった	読みながら楽しめる絵本や色々なものを知って内容の面白さや魅力を知りたいと思った

(4) 保育者として絵本を読み聞かせする上での配慮する視点

実習後の調査(調査2)では保育所実習と幼稚園実習で読み聞かせを実施したねらいについて回答してもらったが、その回答の多くが「絵本を楽しむこと」や「時間の利用」に集中していた。

授業後の調査(調査3)では、講義内容を踏まえて、保育者として読み聞かせする際の配慮について自由記述で回答してもらった。「子どもの発達段階」「子どもの興味関心」「読みかかせの技術」といった基本的な配慮の視点に加えて「読み聞かせで生じるコミュニケーション」「絵本が子どもに与える影響を考えて絵本を選ぶ」といった、読み聞かせの時間だけでなく、絵本の世界と子どもの発達や生活との関連に配慮するといった記述内容が多くなっていた(表4参照)。

表4 保育者として絵本を読み聞かせで配慮する視点

子どもの発達段階への配慮	年齢に合わせて長すぎないもの 今、この年齢の子どもに何を伝えたいか何を感じとってほしいかを考えて選ぶ 年齢によって、文の長さや絵本全体にかかる時間に配慮する 季節を考えたもの、学んでほしいもの等年齢に合った本 子どもの発達段階や様子・状況を理解したうえで、絵本を選びたい
子どもの興味関心	子どもたちに絵本を見て楽しんでもらいたいので、内容や絵が面白く興味深いものを選びたい 子どもの興味関心が持てる点を配慮して選ぶ 子どもが絵本の世界を理解して、その絵本をたのしめるようにゆっくりと子どもたちのペースに合うように読みたい 教育のための絵本ではなく子どもたちが絵本を見てどういう気持ちになってほしいかを考えて選ぶ 子ども達の「今」に一番響いたり、興味をもってたりできるものや伝えたいことがはっきり伝わるものを選ぶ
読み聞かせの技術	全体の様子を把握しながら、絵本を読む 子どもたち自身で絵本に興味持ち、いろんなことを想像し考え楽しみながら見られるように、抑揚をつけたり、リズムカルに読んだり、その絵本に合わせて絵本を読みたい 基本として持ち方、読み方の入りスピード、緩急 子どもが絵本の世界を理解して、その絵本をたのしめるようにゆっくりと子どもたちのペースに合うように読みたい 子どもが絵本の世界に入り込めるように、抑揚をつけて読む(つけすぎない)
読み聞かせで生じるコミュニケーション	読み終わった後に何を感じたかと聞いて子ども同士で話す機会を設けたい 子ども全員と一緒に考え、聞いてみたり、実際絵本に触れて次に起こる展開を楽しみたい 絵本の内容や対象の年齢によって問いかけを含んだり、「どうかな？」と子どもが考える機会を作ってみることも大切 季節や行事に合ったものはもちろんだけど、絵本を読むことで子どもがどんな反応をするかどのような興味を持つだろうかと想像して選ぶ 絵本を通して楽しさや一体感を作りたいときには子どもが参加できるようなオノマトペなど、覚えやすい絵本を選ぶ
絵本が子どもに与える影響	適当に本を選ぶのではなく意図をもって子どもたちに何を伝えたいか、どうしたら伝わるかを考えて選びたい 絵本を通して何を伝えることができるか子どもにどんな影響をもたらすか その絵本を通して何を伝えたいのかをはっきりさせる。 子どもが興味をもっている事柄や行事・季節・設定保育につなげていけるような本を選びたい 絵本を通して子どもがどのような経験や考え方になるのかを理解して読み聞かせを行う

(5) 学生の選書意識・読み聞かせについて縦断的検討

学生の選書や読み聞かせに対する視点がどのように変化したのかを検討するために、3回の調査から、特徴的な個人事例を提示していく。

事例 A) 読書や絵本を元々嫌いだった学生の記述

事例 A は実習・授業前の調査 1 で「読書が嫌いである」「読みきかせの経験を覚えていない」ことを報告しており、読書経験が乏しい学生である。実習中(調査 2)には「時間の利用」をねらいとした読み聞かせを行っていたが、選書理由では「子どもの興味関心」に配慮していた様子である。受講後の調査 3 では「絵本に対して興味がない」という考え方から「内容の面白さや魅力を知りたい」といった絵本への興味関心を示すようになっていく。受講後に読み聞かせたい絵本の選書理由で「絵の柔らかさ」や「内容の深さ」をあげており、受講により絵本への見方が変化したことを確認できた(表 5 参照)。

表 5 事例 A の 3 回の調査における記述

調査 1	本の嗜好	嫌い(理由：本に魅力を感じない、面白いと思えない、読んでいたら眠くなるから)
	絵本の嗜好	やや嫌い(理由：面白くないから)
	好きな絵本	1 冊(だるまさん)
	読み聞かせ経験	覚えていない
	絵本選びで配慮したいこと	ストーリーが楽しいもの
調査 2	保育所実習で選択した本	しゃぼんだま(理由：外で遊ぶ事が多かったので遊びの一つとして興味をもってもらうため)
	保育所での読み聞かせのねらい	給食を配膳するまでの待ち時間の利用のため
	幼稚園実習で選択した本	ばけけけけけけけけけけ(理由：子どもたちがおばけの話を良くしていたから／新しい本で子どもたちは読んでいないと思ったから)
	幼稚園での読み聞かせのねらい	給食を食べ終わっていない子を待つため
調査 3	受講前の絵本の見方	好きな絵本もないし興味もなかった
	受講後の絵本の見方	読みながら楽しめる絵本や色々なものを知って内容の面白さや魅力を知りたいと思った
	受講後読み聞かせたい本	みえるとかみえないとか(理由：宇宙人がかわいらしくて柔らかい絵に親しみやすいと思った／内容が深くてよいお話でユニークな部分もあった)／よかった
	保育者となったときに配慮したい点	人数と場所に応じて選ぶ／絵の見た目の感じ

事例 B) 子どもの頃の読み聞かせ経験が少ない学生の記述

事例 B は実習・授業前の調査 1 で「読書・絵本がやや好き」であるが、読み聞かせの経験が乏しい学生である。また好きな絵本も 1 冊のみであることを報告している。実習中(調査 2)には「朝の会」や「時間の利用」をねらいとした読み聞かせを行っていたとあり、選書理由では「わかりやすさ」や「親しみやすさ」を重視した選書を行っていた。受講後の調査 3 では「絵本が導入に使用するもの」という考え方から「絵本の種類」や「絵の描き方」に興味関心が深まっていた。また「絵本からの学び」に気づき、受講後読み聞かせたい絵本としてバリアフリーをテーマとして絵本を選択している。受講後の学びから保育者として読み聞かせの対象である子どもへの影響を踏まえた選書を意識する視点を重視するようになった(表 6 参照)。

表6 事例Bの3回の調査における記述

調査1	本の嗜好	やや好き(理由:世界観に入り込めるため)
	絵本の嗜好	やや好き(理由:分かりやすくてたまに感動するものがあるから)
	好きな絵本	1冊(もうぬげない)
	読み聞かせ経験	たまにあった(幼稚園や保育所の先生)
	絵本選びで配慮したいこと	発達に応じたもの
調査2	保育所実習で選択した本	くだものやさん(理由:おやつや給食に果物が毎日出ていてもっと果物について興味をもってもありたいという思いがあったため)
	保育所での読み聞かせのねらい	しかけ絵本で果物が隠れるようになっていたのでそれを楽しんでもらうため
	幼稚園実習で選択した本	かえるがみえる(理由:製作で紙コップを使ってかえるが飛ぶというものを作るので、その導入として)
	幼稚園での読み聞かせのねらい	製作活動の導入としてかえるに親しんでもらうため
調査3	受講前の絵本の見方	ただ絵本を見るだけだった
	受講後の絵本の見方	色の使い方や絵の描き方、言葉を見るようになった
	受講後読み聞かせたい本	みえるとかみえないとか(理由:障害を持った人の考え方、それぞれの見方や楽しみ方を少しでも知ってほしい)
	保育者となったときに配慮したい点	子どもの年齢や絵・絵の内容や大きさ／絵本の位置(保育者の座る位置)

事例C)子どもの頃の読み聞かせ経験が多い学生の記述

事例Cは実習・授業前の調査1で「絵本が好きである」こと、子どもの頃読み聞かせてもらった好きな絵本のタイトルを14冊報告している。実習中(調査2)には「設定保育の導入」や「行事を楽しむ」ことをねらいとした読み聞かせを行っており、これらのねらいに合わせた選書をしていたことがうかがえる。調査3では受講前には絵本の「絵」に対して自分の好みを重視していたが、授業の中で絵本作家による特別講義や実際に絵本に触れる経験をしたことで、「絵」に対する視点が深まり、保育者として配慮したい点として子どもの情緒の発達も考慮するなど、より絵本に対する視点が広がったことを確認できた(表7参照)。

表7 事例Cの3回の調査における記述

調査1	本の嗜好	やや好き(理由:未記入)
	絵本の嗜好	好き(理由:内容が深いものが多くて面白いから)
	好きな絵本	14冊(14匹シリーズ／クレヨンのかろちゃん／ぐりとぐら／へんしんトンネル／バムとケロシリーズ／だるまさんシリーズ／そらまめくん／サンタクロースの国ではね／つくつくせんせいシリーズ／ころちゃん他)
	読み聞かせ経験	よくあった(母親・幼稚園や保育所の先生)
	絵本選びで配慮したいこと	発達に応じたもの
調査2	保育所実習で選択した本	むしたちのうんどうかい(理由:運動会を控えている子どもたちに興味を持ってもらいたかった／色々な虫を知ってもらいたいため)
	保育所での読み聞かせのねらい	次の日に七夕まつりがあったので祭りについて興味を持ってもらうため
	幼稚園実習で選択した本	どんぐりにんじゃ(理由:完全実習の導入をするため)
	幼稚園での読み聞かせのねらい	絵本を楽しんでもらうため／帰りの会に集中できるようにするため

表7 つづき

受講前の絵本の見方	リアルな絵などはあまり好まず、かわいらしい絵のものを見ていた。子どもたちに読み聞かせるものと思っていた。
受講後の絵本の見方	リアルな絵ほど、本物の特徴が捉えられていて、面白いと感じるようになった。大人だからこそ楽しめる絵本もあると知った
調査3 受講後読み聞かせたい本	まるまるまるのほん(理由：体験しながら、色の変化も楽しむ事ができたので、子どもも楽しんでもくれると思ったから／色の変化、赤、青、黄色、と原色が使われていて視覚的にも感性が刺激されると思った)
保育者となったときに配慮したい点	絵のかわいらしい本だけでなく、リアルに描かれた絵本も読んだり保育者の好き嫌いで選ばないようにする。伝えたいことがあった場合にはそれに関係する絵本、子どもの感性が育つような絵本を読んでいきたい。

4. 結果からの考察

本報告から、絵本に関する知識を与え、できるだけ多くの絵本に実際に触れさせることの重要性和、それに応じた講義の組み方の必要性が確認された。

調査対象学生は、読書経験に乏しく、調査当時の読書頻度は「月に1日未満」が全体の7割近くを占めていた。短大の授業は忙しく、授業の課題、生活のためのアルバイトの時間を考えると、読書の時間を生み出すことはかなり厳しいというのが実態である。しかしながら、読書経験なしに絵本の選書をするということは考えにくい。保育者としての責任からも、少しでも多くの絵本に触れる機会を持たせ、「絵本を読む」という経験を積ませることは重要である。

そのため、学生に、絵本を読むことは楽しいという気持ちを持たせると、読書離れが少しは改善されるのではないかと、少なくとも絵本に対する興味を喚起することから始めようと考え、2年生後期で開講する「児童文学」の授業内容を構成した。15回の授業の半分をしめる7回を絵本の内容にあて、更に1回を絵本作家(あべ弘士氏)による特別講義とした。初回の講義では1人1冊は必ず絵本を見ることができるよう、50冊ほどの絵本を用意し、時間いっぱい、絵本を読むことを目的とした。その際に心掛けたことは、長く愛され親しまれてきた絵本、前年度に出版された絵本で、絵本学会から長く残しておきたい絵本として選ばれた絵本、また、近年話題にのぼった新しい絵本と、様々なジャンルのものを用意することであり、かつ、学校の図書館に所蔵されている絵本(すぐ手に取ってみることができる)を用意することであった。1コマの授業ではすべての絵本を見ることができなかったが、図書館に行くことができることを知って、その後見てきたと報告する学生もあり、絵本に対する興味・関心が高まったことを実感した授業であった。

学生は多くの絵本があることを知って、絵本の選び方についても考えるようになった。知っている絵本が増えれば、当然選ぶ絵本の種類も増える。その後に行ったグループトークでは、自分の気になった絵本について、理由をつけて発表しあったが、自分とは異なる観点から絵本を選んでいる仲間に刺激を受けた様子が、提出物から読み取ることが出来た。

使用している教科書には、種類別絵本の分類の他に、月別絵本として独立したページをさいているため、実際に保育者となったときに役にたつ。この教科書は、札幌市内の保育者養成校(大学・短大・専門学校)で絵本の講義を受け持っている研究仲間で作成したもので、学生が卒業しても保育者として使えるものを目指して作成したものである。学生はその教科書を参考に、読書記録を種類別に6枚提出することが義務づけられている。「赤ちゃん絵本」「民話絵本」「創作絵本(物語)」「オノマトペ絵本」「バリエーション絵本」は必須で、「科学絵本」「しかけ絵本」「ことばあそび絵本」「平和絵本」と分類されている中から

残り1冊を選んで読み、読書記録として提出する課題である。この中で学生は、参加型の絵本の存在を知り、双方向で楽しむことのできる読み聞かせの存在も知った。今年度の学生には特に、参加型絵本とバリアフリー絵本の存在は、大きな印象を与えたようで、調査にも『まるまるまるのほん』や『みえるとかみえないとか』をあげた学生が複数見受けられた。

絵に関しては、絵本作家の話聞く体験が大きい。本学では、4年にわたり旭川在住の絵本作家あべ弘士氏を招いて特別講義を実施している。あべ氏は、「見る」ということを中心にお話をされることが多く、動物をよく観察することの大切さ、そしてその観察する目から、あべ氏の絵本が多く生み出されていることを知り、学生は絵本の絵についてもそれまでと違った見方、特に興味を持って見る姿勢に変わることが回答から読み取れる。さらに、宮沢賢治の『雪渡り』『水仙月の四日』の絵本を指定し、「絵」の比較をさせた課題で新たな気づきをした学生が多くいた。この課題は2つの物語のどちらかを選び、画家の違いによる物語から受ける印象の違いを比較させたものである。それぞれの絵本には、画家が違うものが4-5種類あり、大学図書館に並べて比較できるようにした。学生は自分が選んだ絵本を読み比べ、原作が同じでも絵の表現による印象の違いを確認するのである。

次に、日本児童文学学会北海道支部機関誌「ヘカッチ」¹第14号(33-43頁)において研究報告した、学生の自由記述から数点例示する。

- *今回この3冊を比較して絵の雰囲気や物語の感じかたが変わるということに気づきました。選んだ3冊は絵の雰囲気が全然違い、この物語ははじめは雪童子やおおかみが子どもをおそい、子どもはふぶきの中こごえて泣いていたり、少し怖い話だなと感じていました。しかし絵を見ていくと、堀川理万子さんの絵でこの物語を読むと文章で読んだ時よりも怖く感じませんでした。しかし鈴木靖将さんの絵で読むと不思議な雰囲気での話にピッタリだと思いました。…中略…赤羽末吉さんは全体的にくすんだような色の使いが多く、他のものよりも昔の時代やなつかしさを感じる作品だと思いました。そこで、同じ色でもくすんだような色、パステル系の少し明るめの色など、色1つで作品の印象を変えられるのだということに気づきました。
- *全く同じ場面が描かれているのに、絵の雰囲気や色の使い方などでこんなにも印象が変わってしまうものだという事に気付いた。以前までは、同じ物語だから内容が分かれば絵本はどれも一緒だと思っていたが、今回絵本の比較をしてみて、これだけの違いがあることが分かった。同じ物語の中の1シーンでもどの人物が中心に描かれているか、風景の中に人物や動物が描かれているのか、それだけで解釈の仕方は違ってくる。保育者として、子どもたちに伝える立場として、感受性や表現力の豊かさが求められると思うが、こういう絵本の比較をすることで、1つの物語を深く知ることができて良いと考える。これからも色々な絵本と触れ合う中で、できるだけ深く知ることができるようになりたいと思った。絵の比較をすることで、自分の好きな絵の雰囲気や、好きな色など、自分のことを知ることができたと思う。子どもたちにも、こういう気付きを感じてもらいたいと考える
- *初めて、同じ原作の絵本を読み比べたが、画家によって全く違う作品になるのだと実感してとても面白かった。文章と絵を分けていたり、絵の中に文章を入れていたり、余白の使い方も異なっていた。また、使う色、塗り方で、絵から感じる気温や、あやしさ、楽しさなど、雰囲気など、感じ方が変わってきた。その違いは、画家の違いだけでなく、伝えたいこと、感じ取ってほしいことがそれぞれ異なっているからだろうと考えた。鈴木まもるさんの『雪わたり』は、私が今回読んだ3冊の中で1番幅広い色を使っていると思う。そのため、「四郎とかんこが不安なのだろう」だったり、「この時は寒そうだ」「この時は楽しそうだ」など、絵からたくさんの感情などが伝わってきた。文字だけではあまり感じな

かったことも、絵から感じたり、想像できた。それは、絵本の良い点なのだろうと、改めて実感できた。おそらく、鈴木まもるさんの絵は、他の2冊よりも、塗り方や色の種類、組み合わせが多いから、私がたくさん考えながら読めたのだと考えた。子どもたちが絵本を読む時も、絵からたくさん情報を得ながら読んでいると思う。様々な画家の絵本を読めたら、雰囲気の違いなども感じられるのだとわかった。私は「可愛い絵本が子どもたちは好きだろう」と思っていたが、それは正しい考え方ではなかったのだと、今回3冊を読み比べて気づいた。

5. まとめと今後の課題

以上、授業構成を工夫した取り組みの成果が、今回の学生の回答に如実に表れている。これまで、絵本に対して、いわば何も知識のなかった学生が、多くの知識を吸収し、目を開かれていく様子が、学生の自由記述から読み取ることができる。

学生が絵本を選ぶ場合、学生自身の絵本に関する知識の裏打ちがあれば、心強い。それは、様々な絵本の選択につながり、保育者として社会に出てからも大きな力となる。絵本の学びというと、とすれば「絵本の読み聞かせ」という点に視点がむく。学生も、実習に行った際に、「どう読むか」ということに不安を持つ。だが、「何を選ぶか」「どうしてその絵本を選んだのか」ということは、保育においてとても重要である。

今回の本稿の取りくみとは別の視点から、学生に絵本に関する学びを深めてもらおうとした先行研究がある。『絵本探究』とした峰本²(2017)の実践である。峰本は杉本³(2016)の実践を参考として、学生に指定した絵本を4回の授業で深く読むという実践を報告している。本稿の研究と大きく違う点は、絵本の「絵」に注目するというよりは、作者や絵本の作られた背景等を調べることに重きを置いている点である。峰本は6冊の絵本(5冊は外国絵本)を指定し、学生に各自で探究したい絵本を決めさせ、グループ分けをして、探究すべき4項目を分担させた。その際、図書館との連携による参考図書を用意、タブレットPCを使用してCiNiiを利用させるなど、学生の探究がしやすい工夫がされた。これは、授業時間の不足を補う上で必要な配慮である。また、情報機器の利用もコロナ感染予防に迫られた1年を振り返ると、これからの授業では積極的に取り入れる場面が多くなると予想される。

次に同じく先行研究例として梶谷ら⁴(2015)の研究をあげる。梶谷らの研究は、学生ではなく教員免許状更新講習において教師に向けた絵本選書の研修として考案・実施したものである。梶谷らは「絵本は適切なものを選ぶ必要があることを理解すること」「絵本を選ぶ目を養うこと」の2つを主なねらいとして研修を行ったが、そこには現職の保育者が、必ずしも絵本を大切にしているとは言えない実態に対する危機感があった。絵本は、「幼稚園教育要領」等にも教育カリキュラムの一環として明確に位置付けられるものであるが、保育者自身が絵本をどれだけじっくり読み、楽しみ、吟味しているかという疑問が残る。日々の忙しさに追われ、絵本は保育のすき間を埋める便利な道具として使用されている実態もある。そこで梶谷らは、免許状更新講習で絵本の比較実践演習に取り組んだのである。この場合の絵本の比較は、本稿の「絵」の比較とは違い、読み合いをして、「耳」から入る言葉を聞きながら絵をすみずみまでじっくりと「読む」体験をさせたものである。3冊の絵本をそうして「読む」ことで、絵本を比較しているのだが、読み聞かせによってお話に入り込み、絵本を選ぶ力を養うという試みである。

絵本の読み合いの取りくみでは、村中が早くから取り組んでいることが知られているが、その村中が保育者を目指す学生との実践をもとに論じた研究が興味深い。(村中, 2017)⁵村中はその中で「読む身体と聞く身体の響きあいを中心に」という副題をつけて、絵本の「身体性」ということを重視した実践を行

い、その結果を報告している。村中は「子どもたちに直接かかわる仕事に就くことを志す学生たちの学びの場で、絵本の力をどう伝えればいいのか、その力の源に、身体性を軸とした読み手と聞き手相互の関わり合いが深く作用していることをどう伝えればいいのか」とし、ふたつの「伝える」について考察している。

村中は絵本を「作者」「読み手」「聞き手」の三者の相互コミュニケーションの場となりうると考え、「『読む』身体と『聞く』身体が相互に関係しあうことで一つの世界が構築」されるとする。「1冊の絵本を介して繰り返される『読む』と『聞く』の情動交流が読みの場全体を温め育てる」とするのである。(村中, 2017)

ここには、絵本の選書に関して、また別の視点がある。「読みあう」ことで、自ずと選ばれる絵本というものがでてくるのではないかという点である。例えば、学生の実習体験として「文字なし」の絵本について書かれたものがある。文字が書かれていない絵本は、最初はどう読むといいのか、そもそも読むものなのか悩んだが、子どもとその絵本を見て行く中で、自然に言葉が出てきたという体験である。子どももいろいろお話をしてくれたということで、この体験は絵本の絵を読む、という点での気づきとして書かれたものであるが、そのまま、村中のいう情動交流の一例になるのではないか。作品である文字なし絵本、読み手である学生、聞き手である子どもは、ある時間の中で絵本を介して確かに交流したのである。正確に「読みあった」となるか疑問は残るが、ここでは読み手の学生と、受け答える的に言葉を発する聞き手の子どもが1冊の絵本を選んで交流しているのである。

絵本を声を出して読むこと、それにより、聞き手と交流すると考えると、「読みあい」できる絵本という選択肢ができる。「読み手」「聞き手」が絵本の中にどっぷりと入り、その絵本を心から楽しみ、共有できるものを選ぶ、という視点が学生に生まれていくと考えられるのである。これは、梶谷らの考察に近いものである。

本稿の研究は、「読みあい」「絵本の探究」の研究とはまた別に、多くの絵本に触れさせる、絵本の内容によって、これまで知らずにいた絵本のジャンルを知らせる、絵本の絵にも着目させる、という視点から、学生に絵本の選書について気づき、意識を持たせる機会を模索したものである。調査結果からは、一定の効果があつたことがうかがえる。読書経験の乏しい学生は、絵本を見ても、どのような絵本が「良い」絵本であるのか、子どもに読み聞かせるというのは、どういうことなのか、多くの絵本を前にして一体どう選ぶのかわからないのが普通である。自分自身の絵の好みや、物語の内容の好みをはっきりしている場合は、そこからの視点でとりあえず選書することはできる。しかし、何も判断材料を持たない学生は一定数存在し、絵本を前にして何もできないのである。そういう状況を何とかするために試行錯誤して、今回取り上げた授業構成が生まれ、ある程度の効果が確認できたことは報告の通りである。この授業構成で最もよかったことは、「絵本は面白い」「たくさんの絵本を読みたい」と考えた学生が、予想以上に増えたことである。しかし、今回の授業構成の工夫が、実際に保育者としての日常に活かせるかどうかは、また別のアプローチが必要であることを、梶谷らの研究や、明石市の取り組み¹⁾の実践報告が示している。このことは、今後の課題である。

6. 展望

読書離れが進んでいる学生に、絵本について学ばせることは工夫が必要である。ともすれば、保育の場面に応じた、子どもの発達段階に応じた、あるいは、すき間時間に応じた絵本を選びたい、マニュアルが欲しいということにつながっていく。実際の授業では、心ならずもそうした学生の希望に沿うような形をとってしまうこともあるのが現実である。

しかし、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂(平成 30 年)により、絵本の持つ力を発揮する場面が多くなるように筆者らは捉えている。絵本は優れた児童文化財であり、絵本に関する知識をふやし、適切に選書し、そして何よりも、子どもと相互コミュニケーションをとりながら絵本を心から楽しむことはこれからの保育者養成の場においてとても大切になるとも考えている。本研究はまだ取り組み始めたばかりの研究であり、課題としてあげたようにこれからさらに考えるべき問題は多いが、今回報告することで絵本研究の一端を示したい。

参考・引用文献

- 1 日本児童文学学会北海道支部機関誌「ヘカッチ」第 14 号 2019 年通巻 23 号 33-43 頁
- 2 峰本義明 2017 年「絵本の学びに対する学生の意識 ―『絵本探究』の授業実践を基に―」新潟青陵大学短期大学部研究報告 第 47 号
- 3 杉本真理子 2016 年「保育学生の「絵本」に関する学びの変化「保育内容の指導法(言葉)における実践」全国保育士養成協議会第 55 回研究大会における配付資料、またその研究大会研究発表論文集(297 頁)
- 4 梶谷恵子, 湯澤美紀, 片平朋世 2015 年「保育者を対象とした絵本選書の研修: 共通テーマによる絵本三冊の比較」ノートルダム清心女子大学紀要, 人間生活学・児童学・食品栄養学編 39 巻 1 号 133-141 頁
- 5 村中李依 2017 年「絵本を学ぶ・絵本から学ぶということ ―読む身体と聞く身体の響きあいを中心に―」「子ども学」(白梅学園大学子ども学研究所)第 5 号 179-204 頁

注 1 2019 年 第 22 回絵本学会大会において、兵庫県明石市の「あかし保育絵本土」養成の試みが報告され、多くの貴重な示唆を受けた。